

八剣山の会春秋

夏季号

平成29年6月20日

「八剣山の会春秋・編集部」発行



<二湖より羅臼岳（知床半島）> 画・小西益樹

た	の	た	も	忙	し	状	付	も	が	そ	た	し	そ	に	そ	ー	こ	助	に
の	で	だ	の	な	た	況	い	得	面	の	。	た	し	そ	か	そ	の	け	悩
で	人	、	は	毎	が	で	た	て	白	後		が	し	仕	の	あ	の	ら	ん
す	に	大	持	日	つ	す	時	、	く	、		、	て	事	後	っ	様	れ	で
。	こ	型	ち	と	つ	。	に	い	て	つ		何	責	に	私	た	な	ま	い
	れ	バ	合	い	、		は	い	、	ま		と	任	も	事	よ	事	し	た
	が	イ	わ	う	在		六	同	面	り		か	を	人	か	う	か	た	私
	趣	ク	せ	こ	職		〇	僚	白	四		責	持	間	ら	で	。	は	こ
	味	や	て	と	中		歳	、	く	〇		任	た	嫌	す	。	れ	こ	の
	で	車	居	も	は		定	上	て	歳		を	さ	い	れ		ば	単	純
	す	が	ま	あ	神		年	司	、	台		果	れ	も	母		母	な	励
	と	好	せ	り	經		を	に	そ	に		た	る	徐	は		は	な	ま
	い	き	ん	趣	的		迎	も	の	な		せ	部	々	一		大	励	ま
	う	で	で	味	な		え	恵	結	な		る	署	に	大		い	ま	し
	も	あ	し	と	病		て	ま	果	つ		様	に	回	なる		なる	し	に
	の	つ	た	呼	気		いた	れ	後	た		に	配	復	楽		楽	に	大
	は	た	。	べる	の		た	て	輩	ら		なり	置	、	天		天	い	い
	な	位		る	事		とい	、	の	仕		ま	さ	い	家		家	に	に
	か	の		様	や		いう	気	信	事		し	れ	つ					
	っ	も		な	多			が	頼			ま	ま	。					

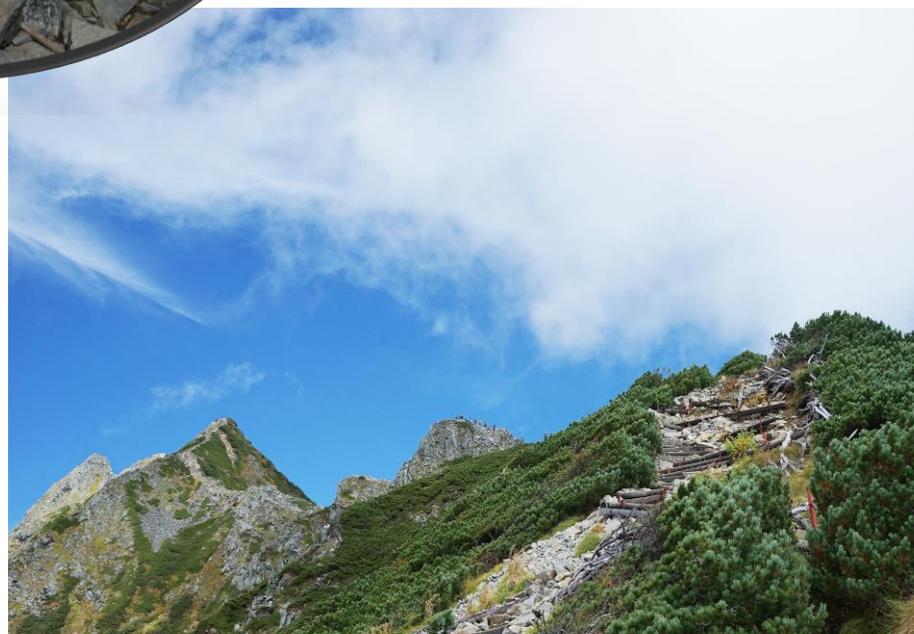
い	を	や	シ	当	二	が	○	入	イ	当	と	に	暮	見	局	き	な	て	
。	見	山	リ	時	足	き	キ	、	ク	時	共	は	ら	る	私	妻	っ	い	私
と	て	の	ー	、	の	つ	ロ	夏	リ	流	に	何	し	こ	が	に	っ	ま	の
の	、	湿	ズ	テ	草	い	走	の	ン	行	健	ら	方	と	再	全	い	し	退
欲	ー	原	が	レ	鞋	事	行	暑	グ	り	康	か	を	と	就	て	た	た	職
望	絶	に	放	ビ	で	も	を	い	用	だ	な	の	模	な	職	の	こ	が	前
と	景	生	映	で	到	あ	目	時	の	し	老	趣	索	り	を	負	と	、	に
ー	や	え	さ	百	達	り	指	期	自	た	後	味	し	ま	担	も	母	父	
山	な	る	れ	名	し	他	し	も	転	サ	を	を	、	し	を	あ	は	は	
好	、	花	て	山	た	の	て	毎	車	イ	得	持	結	た	妻	り	軽	、	
き	こ	々	お	シ	の	趣	い	日	を	ク	る	つ	局	こ	の	、	い	あ	
の	ん	、	り	リ	が	味	ま	二	た	リ	為	の	ー	の	不	本	脳	ち	
人	な	季	高	ー	登	を	し	五	い	ン	の	が	豊	頃	在	来	梗	ら	
達	景	節	山	ズ	山	模	た	キ	ま	グ	術	一	か	か	時	他	塞	の	
が	色	の	か	や	で	索	が	ロ	い	と	と	番	な	ら	に	人	か	世	
見	を	花	ら	絶	し	す	、	、	は	い	し	。と	人	退	母	と	ら	界	
た	見	木	見	景	た	る	結	時	た	う	て	考	生	職	の	も	痴	に	
景	て	の	る	百	。	と	構	に	い	事	先	え	を	後	面	い	呆	旅	
色	み	輝	風	名		い	こ	は	て	で	ず	る	送	倒	、	う	症	立	
を	た	き	景	山		う	れ	七	購	サ	は	る	る	の	を	結	ベ	っ	

、

と	格		う	人	更	登	見	も	性	身	う	で	の	の	も	○	そ	調	見
い	の	し	に	登	に	山	方	身	格	に	の	山	バ	際	百	○	ん	子	な
う	私	か	し	山	大	を	を	に	か	着	で	雑	ロ	一	名	○	な	の	い
の	は	し	た	し	峰	開	吸	着	ら	け	す	誌	メ	人	山	メ	折	の	手
も	一	、	の	な	の	始	収	け	山	る	が	の	丨	で	に	丨	、	り	は
大	人	先	で	が	山	、	す	よ	岳	努	毎	ピ	タ	も	挑	ト	私	の	な
峰	登	に	す	ら	上	そ	る	う	遭	力	号	丨	丨	近	戦	ル	の	り	い
に	山	も	°	並	ヶ	し	と	と	難	を	を	ク	が	中	と	以	会	気	、
登	の	述		行	岳	て	共	地	防	し	一	ス	跳	の	の	上	社	分	見
山	限	べ		し	、	二	に	図	止	た	年	と	ね	山	の	の	の	に	な
を	界	た		て	稲	上	身	の	の	の	間	い	上	か	ブ	山	先	な	い
始	を	通		山	村	山	近	読	見	で	購	う	が	ら	ロ	を	輩	つ	と
め	感	り		装	ゲ	、	な	み	地	す	入	名	っ	。と	グ	制	が	て	損
た	じ	元		備	岳	葛	地	方	か	°	購	称	た	一	を	覇	「	い	損
私	て	来		も	、	城	元	、	ら	元	読	で	の	挙	見	し	奈	た	°
は	い	ビ		充	観	山	の	コ	細	来	し	あ	で	に	つ	た	良	の	と
大	た	ビ		実	音	、	山	ン	か	ビ	山	っ	す	私	け	°	県	で	阿
峰	の	り		す	峰	金	々	パ	な	ビ	知	た	°	の	、	そ	内	す	波
の	で	な		る	と	剛	へ	ス	知	り	識	と	そ	の	「	の	の	°	踊
山	す	性		よ	一	山	の	の	識	な	を	思	れ	心	こ	後	の		り

終	大	気	知	会	っ	で	縛	入	入	処	に	か	同	す		か	測	私	深
わ	い	の	の	の	ぷ	も	り	会	会	が	は	窮	会	°	そ	ら	さ	で	さ
り	に	置	場	行	り	不	が	歴	さ	、	い	屈	に	と	ん	で	れ	は	を
に	楽	け	所	事	ー	思	な	二	せ	知	ま	な	入	こ	な	す	背	何	る
、	し	な	に	に	浸	議	い	年	て	人	い	面	会	ろ	時	°	筋	れ	ほ
八	ん	い	同	、	か	な	が	半	頂	の	ち	が	し	が	、	に	遭	ど	一
劍	で	仲	行	何	っ	く	私	程	く	強	気	、	な	元	八	ヒ	難	人	
山	い	間	さ	回	て	ら	に	に	こ	い	乗	い	か	来	劍	ヤ	と	登	
の	る	と	せ	と	い	い	は	な	と	誘	り	の	と	人	山	リ	い	山	
会	と	の	て	な	る	短	大	り	が	い	せ	は	の	付	の	と	最	で	
の	こ	行	頂	く	と	期	変	ま	が	で	ず	と	誘	き	会	し	終	実	
同	ろ	動	き	参	い	間	居	す	、	現	に	一	い	合	の	た	章	践	
志	で	す	、	加	つ	で	心	が	会	在	いた	人	を	い	存	の	を	経	
に	あ	事	そ	さ	た	あ	地	、	風	の	た	合	受	が	在	を	迎	験	
受	り	の	の	せ	感	る	良	、	が	八	の	点	け	え	を	感	る	の	
け	ま	楽	場	て	で	も	く	、	自	劍	で	し	な	事	じ	て	が	乏	
入	す	し	の	頂	す	の	、	自	由	山	°	、	が	私	た	いた	予	し	
れ	°	さ	感	き	°	の	分	分	で	の		入	は	の				い	
て		を	動	未		ど				に		会		で					

大	出	こ	自	嫌	最	で	自	標	指	達	こ	岳	願	更	さ	帯	た	聞	頂
き	来	の	身	い	近	お	然	達	導	成	の	登	で	に	せ	の	り	か	き
な	る	様	で	が	、	り	の	成	を	と	行	山	あ	は	て	三	、	せ	行
喜	と	な	驚	、	自	ま	偉	に	受	い	事	を	っ	、	貫	〇	又	て	事
び	共	充	き	人	分	す	大	努	け	う	を	目	た	六	い	〇	私	頂	に
で	に	実	で	間	で	。	さ	力	な	事	完	前	百	月	ま	〇	の	い	同
も	よ	し	す	大	も		、	し	が	に	遂	に	名	の	し	メ	念	た	行
あ	き	た	。	好	不		厳	た	ら	な	出	控	山	行	た	ー	願	り	す
り	仲	山		き	思		し	い	更	り	来	え	で	事	。	ト	で	山	る
ま	間	登		に	議		さ	と	な	ま	れ	て	関	と		ル	の	中	
す	を	り		な	な		に	の	る	す	ば	お	西	し	級	の	イ	で	
。	得	の		っ	の		身	欲	目	が	ほ	り	最	て	の	西	ロ	色	
	た	時		て	で		の	望	標	、	ぼ	ま	高	、	穂	穂	ハ	々	
	こ	間		い	す		引	を	を	山	私	。	峰	こ	高	登	を	な	
	と	を		る	が		き	持	設	の	の		の	れ	高	山	教	よ	
	は	得		の	以		締	ち	定	先	当		弥	ま	登	を	え	も	
	私	る		に	前		ま	つ	し	輩	面		山	た	山	を	て	や	
	に	こ		は	の		る	つ	そ	た	の		八	私	を	経	貫	ま	
	と	と		自	人		思	も	の	ち	目		経	の	経	岩	つ	話	
	り	が		分	間		い	大	目	の	標		ヶ	念	験	稜	つ	を	



今
後
も
楽
し
く
、
安
全
に
山
々
の
顔
を
拝
み
た
い
も
の
で
す
。
会
員
の
皆
さ
ん
に
感
謝
、
感
謝
で
す
。

100名山の思い出

2017. 05.24

下谷毅夫

僕の100名山の最初は、学生自分の富士山だった。重いテントを持ち歩き、大変だったが楽しかった。その重いテントは朝鮮戦争の放出品で帆布製、雨風にはめっぽう強かった。このテントは

2年前、四国、山陰への自転車での旅に愛用されたもので自転車とこれさえあればどこへでも旅ができると自信を持った宝物、貴重品であった。そんな経過の中、学生生活最後の旅行は富士山界隈で野営し1週間楽しもうとの計画に野営を含めた登山として実現した。僕らの最初の富士山が、100名山などと当時は仲間の誰も気付いていなかっただろう。重いテントを持ち歩き、大変だったが、簡単に1週間も野外で過ごせたのはとにかく楽しかったの一言に尽きる。

さて、会社生活が始まって、300人ほどの職場でのレクリエーションは夏は山登り、冬はスキーと決まっていた、実力に合わせてコースたどり最後は全員が頂上で集合し万歳、解散となる。最初は丘陵地が多く次第に比良山とか大山とか上高地とだんだんエスカレートしていった。

小さな職場にも山岳部があった。テント、シュラフ、コップフェル、ラジウス、……。週末には、京都北山、南河内、等近場の日帰りが続き、夏休みには南、中央アルプス南アルプスに足を延ばした。不思議に北アルプスには行く機会が少なかった。

1990年代、世の中には100名山ブームが来ていた。テレビにも山の話が出てくるようになりなんとなく賑やかな動きは感じていた。がかなり意識したのはさる女性たちと一緒に登りだしてからであった。一人は教職関係の人であって、そこにある学生の山岳会のメンバーと普段は行動していたが山数も増え整理すると、100山に近く、残りを、聞いてみると、確か15山を残すのみで何とか早くかたづけたいとのこと。誰もが行き着く課題、にぶち当たっているらしい。彼女の知り合いにも同じ課題を持っている人がいて二人ほど同行させてほしいとか。そんなことから、何度か那須、常陸の山々をめぐることから、次第に興味ある深みにのめり込むことになった。

彼女らの実績は、冬の横尾に数年過ごした強者、キリマンジャロを完登者と……なかなかの経験の者、とわ云えあってみると山に取りつかれた楽しい人たちであった。三人は山様、山の好み方がかなり違う。一人は100名山、一人はどの山でもよい、阪神ファンなので情けない阪神に活を入れたく、秋田の虎毛山登りましょうよ。もう一人は関東から我が裏山に当たる、矢田丘陵が面白いと埼玉くんだりから何回も歩きに来る。知人にあうついでに矢田山を歩くのではないのである。何が気に入るのか当方には全く分からない。が正真、一人で歩きに来て黙って帰るのである。どう見ても変人の様子は全くなく、とにかく歩きたいらしい。共通点は、人生は山のみ。なのである。そんなキリマン(そう呼んでおこう)族との会話の出だしは簡単。次はどこ？

あそこがいいな。それにしよう。それで本決まり、誠に衆議一決、決まりが早い。
100名山のお嬢さん(M)は目の前の課題山積なので、案は即刻山ほど出てくる。ソーね、あそこ、あそこ、行きましょ。仕事はたがいに持っているらしいが、会社お都合など検討項目にないみたい。

一人は関東、二人は関西、キャンプ用具を載せて出発、関東のお嬢は適当に
なので、準備は勝手にせい、簡単である。

男女に無頓着な連中(失礼お嬢でした)なのでテント1張りでOK族で当方入れて4人
出歩くのは簡単だった。それ以後、当方の4輪駆動車にテントを積んで(もっともこの
時は例の重いテントではない)1張りのテントに全員押し込んで武尊、至仏、皇海山等々
めぐりあるいた。

また、キリマンジャロの別の仲間を東北に尋ね、彼(この人は男性)の案内で秋田駒、
森吉山、乳頭山、角館に遊び随分世話になった。この男性とは不思議な縁で長い間
お付き合いになる切っ掛けだった。

一時高山の青年自然の家に勤務されていた彼のところにスキーに伺った。

あまりに立派な施設だったので、子供たちのスキーの拠点に使わせたくお願いしたら
快諾され、青年用の施設ですのと恐縮と心配をいただいた。当方は普通の家庭では
大人仕様は当たり前と申し上げ納得いただいたことから始まり以後30数年連続して
施設を借りるきっかけができたことはいまだに思い出深い出来事だった。

この方がさる県の山岳会長殿であったことはのちに聞いたが、たいした方と知り合い
なれたものである。

さて、僕の100名山はこんなことで、常陸尾瀬日光付近で展開した。そして、東北に
広がっていった。ほとんどが5~8名の仲間たちと一緒にキャンプの楽しかったこと。
賑やかだったことは特記すべき時期だった。このころ、入社当時の職域の仲間や
奈良での職域の仲間(亀、トータスグループ)が大勢で同行する。

西暦2000年代に入り、歳も60台半ば、僕の山歩きに異変が来た。同行者の激減
ぶりである。

理由は僕が定年を越えると当然以前の仲間も同じ定年が増える。つまり、歳をとる。
健康上の変化が起きる

職域だと会社の組織も変わり転勤、移動がこのころ増えてきている。

だが一番の理由は、会う機会が減ってきた。話す機会が減ってきたことだろう。

小人数で山登りする方法を進化させ、より安全、より安心に向け苦心する必要性
を感じてきた。

そんな中、今まで以上に、慎重な計画がより一層必要との認識で、

今一度注意を払うべき基本案を作っていた。

小人数での山行が確実になってきた。体力の衰えも進む、判断力(迷い)の衰え、
怪我、等……今までより慎重には、分かるが、何をどのようにするか考えていた。

我が高齢登山の重要な 8 項目

- 60 歳以降は自分の体力にも配慮して、これまでも増して安全な登山の実施条件。
- ② 全日程が晴れを出発の絶対条件とする。行程中は極力好天で終始する計画を行う。
 - ② 宿の予約は無理な出発を誘発するため、取り消しが有料の宿泊予約は極力しない。
 - ③ 車での最終日、下山した日は必ず宿泊する。
 - ④ 常時、登山道を把握するため、GPS は必携とする。1/25000 を常時携帯。
周囲が展望できない状況下でも現在位置が把握できる手段(器具)を携帯する
 - ④ 熊対策、テント宿泊時の夜中、録音再生機が有効。
扇風機と風鈴の組み合わせは実現できず。扇風機の電池が持たず。
ラジオは受信ができないことが多い。
鈴は川の瀬音に負けて役に立たない場合が考えられる。
録音再生機は音量が大きいものが少ない。
 - ⑥ 保険、山岳保険に一時入っていたが、今は未加入。搜索目的の保険に入った。
 - ⑦ ストックの常用
ストックを常用すること。松葉杖まがいに使えば片足の故障はかなり救える。
 - ⑧ テントを常装備、ツェルトを手に入れ数回の仮泊をテストした。まあ、快適。
毎年、高齢者の悲しい遭難が多い。若者の落下、雪中遭難とは明らかに異なる。
迷った挙句の衰弱かと思われるものが多い。

以上の内容で、還暦以後は、この内容で努力していこうと心に決めた。

さて、こんな内容で 60～65 歳に挑んだ。過去 5 年間は 24 山中

5 人以上が 5 山、3 人以上が 15 山。次はどうか。

次の 65～70 歳は恐れていた小人数現象が歴然であった。なんと、

11 山すべてが二人だけの登山であった。

北海道：羅臼、斜里、阿寒、トムラウシ、東北：早池峰、岩手、八幡平、丹沢、天城山、
塩見岳、九州：宮之浦

あと 11 山、残っている、今のままでは不安である。70 歳を超えた。基本 8 項目、

これで大丈夫であろうか ここから、4 年間は一つも登れなかった。

北海道、東北が中心だけに、ツェルトのテスト宿泊、熊対策の試作品

のテストも何回かやってみた。電池式扇風機と風鈴の組み合わせは 1 夜中働かせる
ことが難しい。電池を大きくすればよいのだが、携帯性が損なわれる。とのことで断念。

次は、携帯レコーダーの出番だ。店頭で最も大きな音が出せるものを探し、最高音量で
音楽を録音し再生させ熊が寄り付かないかのテストである。

レコーダーの再生音量は物足りないが仕方がないかと決めてかかった。

空き缶に入れて動作させると共鳴ですこし音が大きく聞こえる、電池の補強は簡単だ。

この方式に決めた。心の準備、装備の工夫と点検に 4 年も使った。ことになる。

この4年間で次の11山に登る気力の貯えと安全の見直しの時であった。
準備品が役立ったか？ 事故は避けられている。陰に陽に効き目があったと思いたい。
これをしなかったら不安感がつくの、したから安心して出かけられた。だから効果
てきめんと自画自賛している。安心感はおおいに増して山に臨めたといえる。

2012年8月。74歳、まず幌尻岳だが最も行く難しい山である。その為か多くの人が
100名山の最後の山になってしまっているらしい。

理由の一つはアプローチの林道は唯一権利を持つ地元の山岳会が運行するバスに
乗らねばならない。ターミナルにある『とよぬか山荘』に宿泊して翌朝3時に出る
バスに乗るのが便利なのである。が

バスは1日1往復と決まっているので、予約がなかなか取れない。つぎに、幌尻山荘
までの途中道には膝を越すぐらいの深みを15回ほど渡渉する。少しの雨でも渡渉禁止
となることが多い川なので登山中止が発令されると登山も下山もできなくなる。

この山はこんな理由で最も要注意の山なのである。

とよぬか山荘からのバスは朝3時の出発。荷物は搬送のトラックに乗せる。1時間半
ぐらいで登山道口となる。そこから、10数回の渡渉を繰り返し幌尻山荘に着く。

小屋に小荷物を預け頂上往復がその日の仕事だ。頂上からは、ラウンドコースがあり
余分に一日楽しめそうだったが、熊多く、小屋の2泊は難しそうだったので素直に
頂上往復で我慢した。その日は、荷物を預けた幌尻山荘に自炊で泊まり翌朝に来た
道に戻るとよぬか山荘に泊まった。僕らは無事登顶に成功したが、翌朝3時出発予定の
グループは登れずに解散させられた。予約満員なので、翌日登山を申請しても
受け付けられない。結局彼らは無念の解散だった。同情を禁じえなかった。

この山だけを目当てに本州や九州あたりから来ている人もいるはず。どんな思いでここ
を去るのだろうと心を痛めた。僕は数時間後にこの宿を後にし、大雪と十勝岳を家内と
、登り、一路帰路に就いた。

一月後、この年2回目の北海道に挑んだ。最北の利尻山と最南の羊蹄山。この時は
家内に見放され一人旅だった。理由は簡単、前回は巨大な握り飯4個が朝と昼食
に配られた。1個で2食分の大きさ、二人で4食分はあった。これを捨てる事も出来ず、
朝、昼、晩、朝の4食に使った。北海道まで来て4食とも握り飯は非難の的となった。
御免なさいだけで、済ませるはずもなく、今回は一人旅をしいられた。

舞鶴、小樽、札幌、稚内、利尻(オタドマリ)とたどり、キャンプ場へは民宿の主人に送って
もらった。まず、びっくりしたのは、今9:30。登り5.5時間の行程である、なのに
目先の案内板には12時迄に頂上に達しない場合はその時点で下山しろと、ある。
稚内から始発のフェリーを使い登山口でのこの看板。一番フェリーで来て登れないの？
堪忍してよ、でも僕は完全無視と決め込む。

頂上に3時半過ぎに着いた。上りの長官山以降は誰にも会わず、一人旅。

うす暗くなつての下山は、寂しく心細い一人旅だった。港の宿で一夜を過ごし

翌日は北海道を南下する日、比羅夫の駅に向かう。そこはJRの駅である。ホームに
隣接する宿に入り、大木をくりぬいたバスタブの風呂に入った。いい気分です湯上りし

出口の暖簾を分けて外に出るとそこはホームの上、目前に電車が停車しており、客室の入り口が開かれて客の目が笑っている。3メートル先である。

この宿は駅舎、風呂も駅舎、庭は駅のホーム。宿の親父は駅の委託管理者？

不思議な場所で一夜を過ごした。北海道の名山は終わった。

大物は、朝日岳、飯豊山(東北)と聖岳、光岳(南アルプス)等が残っているだけである。

2013年75歳に突入。7月好天が続きそうなので聖、テカリ(光岳)を目指した。長距離を歩くので家内を残しての一人旅、好天が期待できたので半ばルンルン半ば一人旅の不安、を抱えての旅立ちだった。

聖は聖小屋に一泊してから頂上を目指すか、小屋を通り過ぎて頂上を極めてから小屋に入るかが以後の光岳への力配分に大きな影響が出る。元気なうちに頂上を極めることにしたが、無理をしたためか小屋に向かう段階では暗闇の中だった。小屋への分岐点はここなのか、この先にあるのか、急に不安が襲った。しまった、道に迷ったか、周りに誰もいない暗闇でパニックが襲ってきた。こんな局面で手慣れた右手が動き懐のGPS(gamin oregon)を握る。電池は残ってる筈だ、画面のランプのスイッチを押す。画面が見えた！カーソルはこの分岐上にあつた。ガイドの道しるべはオレンジ色で小屋までのルートを示していた。宝物に頼ずりをした。長年、こんな場面のために、無駄と思いつつも毎回ぶら下げていたもののご利益にあずかったのだ。

地図を読む、方位を図る、周りを観察する、明るければ、心の余裕もある、この場合も明るかったら余裕で切り抜けただろうが。暗闇で誰もいないこの時はかなり焦った。GPSがオレンジの道しるべを画面に示してくれた瞬間役に立ってくれたんだ、おおきに。20分後小屋に到着した。暗闇は怖い、との反省とGPSの有難さをしみじみ味わった。邪魔になろうと、重かろうと今後とも、絶対身から外すことはないだろう。

この日の頑張り、翌日以後の行程は青空を仰ぎつつ快適に光岳に向けて進んだ。でも失敗はあった。年配者には4時に到着すれば夕飯の準備をしておく。さもなければ、夕食無し。光岳の規則である。知ってたけど、うっかり30分の遅刻だ。祈る気持ちで親父の顔を伺ったが、ノーだった。ここは村立、役所色。お湯を貰い夕食はラーメンで。翌月の東北朝日岳、飯豊山の前哨戦は何とか旨くこなせた。快調だった。体もよく動いたし、いい気分だった。

2013年75歳、東北の2山を一度に登る計画で8/18日に旅立った。車である。夕方朝日岳のアプローチ道に到着。あと1,2時間で登山口の朝日鉱泉だった。目の前の道路に巨大なゲートがあり閉じられている。嫌な予感がした。夏の大雨で道路が消え、橋が流されて大被害がこの先にあつたとの事。しまった、南アの快調さに浮かれて大失策だ。朝日岳の登山道の調査を怠っていたのだ。このルートがダメなら別ルートをたどるとすると半日以上ロス、後の計画がすべて壊れる。この山は来年にしよう。今夜は近場でテント泊、明日は飯豊山登山口まで、次の日に飯豊に登る。決定だ。翌日移動、飯豊山登山口にテント泊、翌朝、飯豊登山。下山後、筑波で家内と合流

珍しくホテルに泊まり早朝に筑波山に登山、神社に参り奈良に向けて帰路に就いた。

2014年8月13日、家内と朝日岳に向かう。朝日鉱泉口はいまだ不通だった。変更した古寺鉱泉ルートをとって、12時間後に下山できた。体調不良の家内は2時間ばかり歩き一服清水まで登ってきたと、木立の枝に書置きがあった。体調はどうやら回復したらしい。帰路は予定通り進められる。

古寺鉱泉に1泊し、美ヶ原の、王が頭を最後の山として記録した。8月15日であった。記念すべき、最後の山は、傘のさせない強風と大雨に見舞われた。

多分、神が最後の記念に印象深い記憶を作ってやろうとの気配りだったのだろう。神の思し召し通り強烈な吹き降りの日であった。好天登山がモットーなんてよく言うね家内と言い合っておお笑いした。

かくして、100名山を完登してほっとした。思えば、この間にはいくつかのエポックがあった。学友、職域の3グループ、キリマングループ、そして我が家内それぞれがある年度、ある地域の登山の主たる仲間を果たしてくれた。今回、横軸に地域、縦軸に上が最近、下が昔と年度、を書いて、山名に月日と人数を書き添えて表を作ってみた。A4,3ページの表は北海道から関東、九州とすると右肩下がりの登頂実績表が示される。僕の場合は、なぜかアルプス登山は南から始めたので、北岳、間ノ岳、甲斐駒仙丈、鳳凰山などは右肩下がりのいちばん下で1850年代にみられた。上記グループとのかかわりを色鉛筆で色を付けると5色の塊が見られた。

その時々、僕の登山行脚を盛り立ててくれた方々の顔が思い浮かび、しばし昔を思い出させて貰った。各位には本当に感謝の誠をささげたい。

今、僕は、八剣山の会にお世話になっている。100名山だけを今回取り上げたが、実は整理未着手の写真が山と積まれていること、数倍の規模の思い出があることを再確認し心が暖められた。そして、今新しい思い出が八剣山の会の活動と共に 増えつつある。この年になって山歩きができる、この歳になっても山歩きができる仲間がいる、この先もうしばらくはなくなる。このことを、この上ない幸と思っている。

あと半年で80歳、一人での山歩きはできないものと、自分に言い聞かせている。

なので 皆さん、今後ともよろしく願いいたします。

したや

尾瀬・燧岳は独立峰につき・・・

2017.5.29 赤井友洸

思い出よみがえる

私の拙い山登りの流れの中で、初期の頃の山行以外は記録を残していませんでした。登山を始めた頃は所属の山岳会誌に記録を掲載する場合があつて、手帳に記録をしていたのです。しかし、会を離れるとそのプレッシャーから開放され、記録無しの登山となつて今に至っております。山行も休眠していた時期もありましたので、延々と続いてきた訳ではありません。

記録については、脳裏にしまっておけばそれで十分だと、勝手に決め込んでいるのでしょう。と言つても、詳細な事象などは覚えられるはずが無く、訪れた山名は覚えていても、どのルートで行ったか？となると、思い出せない事も少なくありません（国土地理院の地図を開くと、意外と思い出せるものですが・・・）。

ごくごく最近の事なのですが、使用していない机の抽斗から、山行きを記録した手帳が一冊出てきたのです。それ故、思い出せなかった記憶が再びよみがえり、記憶の欠落が補われる事になりました。長年、入山ルートが思い出せず、心に引っかかっていたその山行について書きます。

雪の尾瀬

記録では昭和53年4月29日の夕刻の大阪発でした。連休の尾瀬登山です。メンバーは3人（男2人、女1人）で私が最年少でした。

遠隔の地へは今も昔も前夜発。翌日の夕刻までにキャンプ地に着く予定とすれば、大垣発東京行きの深夜普通列車の利用で十分な事が解つたのです。大阪から大垣行きに乘車。大垣で乗り換えて東京（静岡からは快速になったと思います）まで列車に揺られます。記録では明け方に東京着になっています。そして上越線で沼田まで。沼田からバスにて尾瀬入り口まで。実はこの尾瀬への「入り口」がどこだったか思い出せなかったのです。記憶が飛んでいたのです。答えは富士見下でした。

あの頃は、我々の仲間うちでは春山はスキー登山が流行で、その時もスキー持参の山登りでした。雪面は可能な限りスキーで歩きます。スキーと言つてもグレンデスキー板とは違い、かかとが上下に動く西ドイツ製のビンディングです。下降のときは山靴をスキーに固定できます。板の長さもかなり短めです。

30日の入山初日は、雪が現れるやスキーに履き替え高度を稼ぎ、富士見峠の雪面でテント泊でした。

翌日5月1日の予定は尾瀬ヶ原の見晴十字路まででしたので、昼ごろには到着し、テントの設営も順調に終わりました。

この日は初めて尾瀬の核心部を眺める事になりました。見渡す限りの広大な雪の平原です。生まれてこの方、見た事もない様な広さの白い雪原が延々と続いております感動でした。今でも、その雪原のモノトーンの景色が忘れられません。その遙か先には、雪を抱いた尾瀬の山並みが立ちほだかっていました。この見晴十字路が、明日からの山登りの拠点です。

橋板がない・・・

翌2日は西方の至仏岳へ。昨日の重装備から開放されて、自然に気分も軽快。遠くに眺める至仏の山面はスキーで降りれば最高だろうなあと、思いを胸に平原をスキーで進みます。

ところが……。登り口まで雪面が続いていると思いきや、突然、ゆるりと流れる川が行く手を阻んでいます。川幅もそれなりにあります。眼前の川幅から考えて、川幅が狭くなっている場所があるとも思えません。ただ唯一の救いは、鉄道の線路の様に二本の鉄路が懸かっていることでした。もちろん枕木がない状態で……。鉄路を踏み違えれば川に転落、生きては帰れまい、さあどうする???

剣岳の合宿の帰途、富山駅に向かって線路を歩いた時の宙吊り線路が思い出されます。ケーブルカーの麓の立山駅までは到着できたものの、台風被害で富山地鉄が運休中。やむを得ず富山駅に向かって鉄道敷きを歩いていた時、橋脚が流され濁流の上を線路が宙吊りになっていたのです。その時は枕木がそのまま残っており、揺れる枕木の上をビクビクしながら一人ずつ渡ったものです。今回はあの時ほどの距離は無いものの、枕木がありません。私一人だったら引き返していたかも知れません。

しかし、他の二人はスキーをザックに固定して慎重に渡りきったので、私も後に続かねばならない状況になってしまいました。慎重に、慎重に、何とかクリア。そこを超えれば山頂まで危険な箇所はなく、スキー登山が可能でした。頂上直下でスキーをデポ、まずは頂上まで。しばし休憩の後、下山。

下りはスキーに付けたシールを外します。後はゲレンデスキーでは味わえない広大な雪面を滑降です。と言っても、スキー術は山スキーから始めましたので、技術的に華麗なターンが出来るわけでも無く、危うい所は斜滑降です。キックターンで方向を変えて再び斜滑降（それ以上に急斜面はズルズルと横滑りで下降）。その繰り返しです。

傾斜が緩くなっても、せいぜいシュテムターンが関の山。それも転倒しながら……。ザックを背負ってのスキーの転倒は体力の消耗が著しい。尾瀬ヶ原に向かって高度を下げても、あの渡河を思うと気が重い。

で、いよいよあの橋の所へくると……。今度は、何と枕木が隙間を空けずに敷き詰められているではないか!!。いやあ、これで川に転落する心配も無くなり、天にも昇る気持ちでスキーを担ぎ、渡ったこと覚えています。たぶん尾瀬の関係の人が敷き詰めてくれたのでしょう。感謝、感謝でした。

帰路を見つけるために・・・

3日。予定の最後の山は燧岳。アプローチは至仏山よりは短いですが、見上げた様子では頂上までのスキー登山は難しそう。まあ、行けるところまでスキーで行く事にして登る。登りながらも、樹林の間から見え隠れする下山の斜面をあれこれ考えながら進みます。スキー登山の楽しみでもありました。やがて樹林帯も抜けしばらく行くと、岩場や厳しい傾斜等でスキーを脱がざるを得なくなり、スキーをデポ。アイゼン、ピッケルで山頂まで。頂上を満喫。

下山はスキーデポ地まで下り、スキーに履き替えいよいよ下降です。下降は樹林のな

い広々した斜面を利用します。前日の至仏山に比べると斜面が厳しく、斜滑降→キックターン→斜滑降の連続。雪面の広がる所を選びながら下降を繰り返し、やがて樹林帯に入ります。気にはなっていたのですが、登り道とはかなり逸脱した方向に下ったみたいですね。往路のトレースが見つからなくなっていました。スキーに都合のよい所ばかりを選び下降したので、かなり離れてしまったものと思われます。スキーでの下降は自己に都合のよい箇所ばかりを選び、しかも瞬時に距離を進んでしまうので、間違った箇所まで登り直すのが大変です。それが如実に出てしまいました。

地図で位置確認もしますが、樹林帯ではなかなか自分の位置がわからない。そこで私が提案した方法は、山を一周すれば必ず登りのトレースに出会うという、何とも原始的な方法でした。山並みが延々続く連山では、山腹をいくら水平に進んでもラウンドは無理です。しかし、地図の燧岳は独立峰に近く、山腹を一回りすれば必ず辿った道に出会えます。一周が可能な高度にいると判断したのです。

東に逸脱しているのは確実なので、今度は西方にひたすら斜滑降です。樹林帯ゆえにスピードは出せず、木々の間を出来るだけ水平に滑り続ける事にしました。春山の常として、樹木の周囲は雪が融け、下部が空洞になり危険です。慎重に樹間を選び横へ横へと進みます。

どれ位の時間が経過したでしょうか、やっと前方にスキーのトレースを見つけた時は、あたりも薄暗くなっていました。その後は忠実にトレースを辿り、無事テントに着きました。往路のトレースが有難く思えた帰路でした。

もしや氷の割れ目が・・・

4日は下山の日。見晴十字路のテントを撤収し、沼尻を越えて尾瀬沼に向かいます。しかし沼は全て雪の下で、水面が見えず雪原になっています。結氷して上が雪に覆われているのです。スキーで歩きます。湖面と思われる所以は、雪面がほぼ水平で高低さを感じないところでした。心配症の私は、薄氷部分やクレバスのような箇所があるのじゃないかと心配しきりでした。しかし、厳しい尾瀬の自然は、春になっても厚い氷が沼を覆っていたようです。

尾瀬のメインルートの一つ、三平峠から大清水に下山いたしました。タクシーで沼田まで戻ったのですが、車にスキーキャリアがないので車内に持ち込みです。尾瀬のスキーを楽しむ登山客は少数だった故、キャリア装着のタクシーも無かったのじゃないかと思われま。

緑の尾瀬ヶ原と尾瀬沼が・・・

昨夏、2度目の燧岳へ行く機会に恵まれました。会津駒ヶ岳と燧岳の両峰が目的です。時代の流れで今回は自家用車利用です。私の希望もあって松枝岐経由としました。今回は燧岳登山もさることながら、地方歌舞伎を残している松枝岐村を見る事が眼目でもありました。加えて、山頂から無雪期の尾瀬ヶ原・尾瀬沼を見たかったのです。

初日の会津駒ヶ岳は晴天で、その先の中門岳まで歩を進めることができました。

二日目は燧岳です。御池の駐車場に車を置いてのピストン登山となります。この日は登り口から曇天で、途中から降雨で雨具を羽織ったの登山となりました。頂上付近は雨

も止みましたが、ガスがかかり尾瀬ヶ原や尾瀬沼も見えず、頂上を踏んだだけの山行きに終わってしまいました。

よって私の記憶の尾瀬ヶ原や尾瀬沼は白い尾瀬のままです。木道も広大な沼も想像するだけです。

38年はひと昔？それとも・・・

歌舞伎は会津駒ヶ岳登山の前日に公演があったようで、幟がそのまま残されていました。村に張られたポスターも残っていました。出された演目は「熊谷陣屋」、「三番叟」だったようです。「熊谷陣屋」は有名な一の谷の源平合戦です。熊谷次郎直実が平敦盛を討ちとったとして、大将の源義経の前での首実検がクライマックスです。実はその首こそ、直実が手にかけて息子の首で、何とも悲しい物語です。(自分の主人である義経の思いを“村度”したのです。)

江戸時代から続く歌舞伎の村だけに、プロの役者に遜色なく演じられたのでしょう。もう一日早く当地に来ておれば観る事ができたのにと・・・、残念でなりません。村の人に尋ねると、観劇は無料とのことで、なおさら残念！！。

物語の終盤直前は、直実が「16年はひと昔(息子の享年)」と呟き、僧形に身を変えて花道を引っ込みます。

思えば私にとって38年ぶりの尾瀬・燧岳でした。



六甲全縦走路シリーズを終えて

平成 29 年 4 月 25 日

真田一郎

去る 3 月 23 日、美浪、高見、須藤の精鋭三氏と真田のメンバーで P4「記念碑台」～「最高峰」～「東六甲分岐点」に加えて、次回に実施予定だった P5「分岐点」～「宝塚」間を併せて歩き、終着点の宝塚に下山した。宝塚で飲んだビールの美味さは格別だった。

これで、初回の平成 26 年 3 月 28 日に「須磨浦公園」を発して以来、足かけ 3 年全路 50km 余を歩破した。



記念碑台



酒持ち込み OK のうどん屋で昼食



女性を誘う名人あり

この頂上を訪れて一人であった記憶はない、誰かがいる場所のようだ



明るいうちに下山できて安堵する
宝塚版 田代橋にて



小女歌劇団の街らしいモニュメント

私的には、中高生時代の古いアルバムを開きながらの散策であった。

Part 1 以来、このシリーズに参加していただいたメンバーに御礼です。

~~~~~完~~~~~

## 琵琶湖トレイル紀行

2017.4.7 美浪敏明

琵琶湖トレイルは毎年春の行事として企画案内しています。これまで湖南、湖西エリアを走破して昨年は湖北の余呉湖から賤ヶ岳古戦場を巡りました。

今年は3月30日（木）第六回目となる琵琶湖トレイルを企画実施しました！

行程は、湖北観音の里 JR 高月駅から浅井小谷城址を探索した後、湖北みずとりステーションからさざなみ街道を長浜に向けて歩く総距離21kmのウォークです。

参加メンバーは健脚組の須藤さん、高見さん、安田さん、小生の4名でした。

榛原駅行きバス始発に乗車、早朝バスに乗るのは久しぶりである。前日の天気予報通り曇り空ではあるが暖かい朝です。雨の心配はなし！皆意気軒高にバスに乗車、一路高月へ途中乗換スムーズにいき、9時前には到着しました。

木之本から高月にかけての地域は国宝や重要文化財に指定されている仏像が多く観音の里として知られている。ことに高月は観音菩薩が多数伝わり町内21の集落に26体を数えるとの事である。

早速、観光案内所でエリアマップを入手、小谷城跡までの距離を確認する。6～7kmあるとの事であった。まず、渡岸寺観音堂の見学の為、入場料500円を支払う。聖武天皇の勅願により泰澄大師が彫刻したと伝わる十一面観音立像を安置、全国に7体ある国宝十一面観音の中でも最も美しいとされているがまさにその通りで、優しい顔立ちの観音様である。住職の説明も耳に入らず無心にスケッチしました。



20分程寄り道したのち小谷城跡を目指す。おばあさんが畑で草取りされている（こんにちは）と声掛け、小谷城に行かれるのですかと返事、頑張りますと答える。暖かくてのどかな朝方である。

小谷城について見聞録を参考に記しておきます。

① 小谷城は初代亮政が大永年間（1521～1528）に築城したものとされている。落城は三代長政の天正元年9月1日（1573）。小谷城攻略武功第一として、秀吉は浅井氏遺領

のうち十二万石相当と小谷城を拝領し、入城、初めて城持大名になる。

## ② 浅井氏三代

江北（近江北部）の浅井氏が戦国大名として台頭するのは亮政の時代から。

それまでは江南は六角氏、江北は京極氏が守護大名として覇を競っておりました。

その京極氏が大永3年（1523）高濂の時、跡目争いがおこり、次男高慶立てようとする執権上坂信光派に対抗して長男高延を擁して、その勢力を一掃し、小谷山上に築城して京極氏父子を迎えたのが始まりです。

それより二代久政に至るまで。或は江南の六角氏と戦い、或は領内の水を治め、或は部下の武将たちを纏める等、苦心の末に確固たる力を蓄える。

## ③ 姉川の戦

覇気に満ちた三代長政は、永禄三年（1560）16歳にして六角義賢の大軍と野良田に戦います。二倍半に及ぶ六角勢を打ち取り一躍勇名を馳せ、正式に家督を相続することになります。更に翌永禄四年には美濃の斎藤氏を美影寺川に敗る等、浅井氏の實力は上洛を志す織田信長にとって重大な関心事となり、その妹お市の方との縁組が成立する。長政、お市の方の平和な家庭も十年余りにして破れる時がくる。

元亀元年（1570）四月、織田信長が湖西路を通り盟友朝倉義景を攻めたとき、長政は意を決して江越国境にこれ襲撃し破ります。

信長は同年六月、徳川家康の援軍を得て近江に侵入し、浅井、朝倉軍は野村、三田で姉川を挟んでこれを迎え撃つことになりました。

六月二十八日卯の刻（午前六時）先端は切って落とされ、前半戦は北軍有利のうちに進み、浅井の先鋒磯野勢は数倍する軍勢の信長の本陣間近まで斬り込みました。

しかし、朝倉勢が退き三方を包囲されるに及んで、巳の刻（10時）遂に小谷城へと敗走せざるを得なくなる。

## ④ 小谷城跡

浅井氏の居城小谷城は滋賀県東北部に位置し、小谷山上にあり、湖北平野のほぼ中心にあってこれを一望することができる。北陸路と中仙道の要所をおさえ、琵琶湖へも近く、まさに重要な地にあります。

今もなお、山上には浅井三代の城の遺構が、麓の清水谷には、浅井氏や家臣団の屋敷跡が残っていて、曲線的な中世山城として、国指定の史跡になっています。

小谷城跡は規模も極めて壮大であり、地形を巧みに利用した独特の工夫もこらされており、日本五大山城の一つに数えられています。

## ⑤ お市の方

織田信長の妹、信長の同盟政策により浅井長政に輿入れする。小谷城落城後の天正11年（1582）柴田勝家と再婚、天正11年賤ヶ岳で柴田軍が敗れ、勝家と共に自刃する。

## ⑥ 浅井三姉妹

長女、茶々 豊臣秀吉の側室となり、大阪城にて秀頼を生む。秀吉が慶長3年（1598）に没した後、関ヶ原の合戦、方広寺の鐘銘をきっかけとした大坂冬の陣を経て、元和元年（1615）大坂夏の陣で落城、秀頼とともに自刃

次女、初 京極高次に嫁ぎ、夫が没した後は出家して常高院と号した。豊臣方と徳川方が対立した大阪の陣では両家をつなぐ使者として活躍した。

三女、江 小谷城落城の年に生まれ、信長没した後、三姉妹は秀吉の保護のもと育った。江は天正 12 年 (1584) 佐治一成と、文禄元年 (1592) に羽柴小吉秀勝と結婚。しかし一成とは秀吉の命で離縁させられ、秀勝とは死別している。

文禄 4 年 (1595) 6 歳年下の徳川秀忠と 3 度目の結婚をし、2 代将軍となった秀忠との間に 2 男 5 女をもうけた。このうち長男の家光は 3 代将軍に五女の和子は後水尾天皇のもとへ輿入れし、興子内親王 (後の明正天皇) を生み、将軍家、天皇家に浅井家の血筋を残している。江戸城で 54 歳の生涯を閉じた江は、その死後当代の女性としては最高位の従一位を贈られ、東京芝の増上寺に眠る。

小谷山には色々な入山コースがある。我々は高見さんの案内で小谷城戦国歴史資料館横の追手道コースを巡る。大嶽城跡 (495m) へは 2.7 km の標識がある。

登り厳しい山道が続く。追手前～出丸跡～金吾丸跡～番所跡へ途中望笠峠で小休止、眼下に竹生島が見える絶景ポイントでした。金吾丸跡までは車道があり、番所跡には孫を連れた家族ずれと出会う。案内看板を見て、小谷山最高峰の大嶽城砦は「おおづく」と読むとおそわり、頑張って本丸跡まで登りなさいと励まされる。

ここまで来たからには頑張るしかない。



本丸跡は天守など城の中心となる建物があつたと推定される。南側に石積みが残る。北側には大堀切が見られた。

周囲散策の後、下山。下りは足元を気にしながら降り、河毛駅を目指す。途中虎御前山脇を通る。虎御前山は小谷城跡南側の標高 229m 独立丘陵である。元亀 3 年 (1572) 8 月信長軍は小谷城を攻めるため虎御前山に城を築いた。ハイキングコースもあり機会を見つけ登ってみたい。

河毛駅 11 時 30 分の予定が大幅に超過、昼は河毛駅に変更したが食堂もコンビニもなし、我慢して小休止、13 時 30 分発のコミュニティーバスに予約乗車、片道 200 円 4 名貸切である。6.1 km 稼ぎ 16 分ほどでみずとりステーションに着く。

腹ごしらえに天ぷらうどんを注文、須藤さんは小魚の天麩羅、安田さんは稲荷ずしを売

店で調達、実に美味かった。買い物も済ませ2時半に出発。ようやくさざなみ街道である。左手に伊吹山、右手に竹生島を抱え長浜に向けて12kmのサイクリング道を歩く。琵琶湖の風を感じながら湖畔の落葉樹と湖面の竹生島、湖西の山々、暫く歩くと左前方にピンクの桃の花が咲き、その先の残雪の伊吹山は見事であった。思わずカメラに収める。対岸の山に沈む夕日が美しい場所でもある。



湖畔に沿ってところどころ見晴らし台がある。あれは密猟を監視する台で通報するため隠れ小屋になっていると云う人もいるが、野鳥を観察するために設けている観察台が正しいと思う。水鳥たちが気持ち良さそうに泳いでいる。コンクリートの道は足裏に堪えるが黙々と歩く。これも健康の為だと思えば我慢もできる。サイクリングロードが整備されているので自転車を楽しむ人々とのすれ違いが多い。レンタサイクルで巡るのも良いと思ったりする。早崎内湖ビオトープ、奥びわスポーツの森、産直びわ水辺の里を過ぎ長浜城がようやく見えてきた。



JR 長浜駅に着いたのは17時であった。皆さんの頑張りのお陰で充実した一日を過ごせました。来年は湖東エリアを巡ります。小生の古希を記念して秋に湖東三山巡りを企画したいと考えています。以上、文責美浪

# 日本一の桜山チャレンジ紀行

2017年4月20日 須藤和雄

<プロローグ>

この山行き計画「吉野山下山観桜」に至った経過から説明したい。

近くの額井岳麓の十八神社にある展望図に『大峰山脈』の表示があり身近な山域である。



故事ことわざ辞典にある「山高きが故に貴からず、樹あるをもって貴しとす。」を意識してか近くの大峰山脈に憧れを持つ。色々登って見てガッカリした記憶は無い。

この紀行は2016年5月10～11日(水) 大峯奥駈道トレッキング(洞川→吉野)から始まる。コースは【天川村一泊→五番関→大天井ヶ岳→四寸岩山→青ヶ根峰→吉野山】この計画は天候条件が合わず「残念ながら中止、山は逃げて行かない。何時かきつこのコースを歩みたい。」と締め括っている。

執念深いのか今年2017年1月の「2017年活動計画検討会」で決めて貰ったのが

●4月13日(木)青根ヶ峰-吉野山花見【企画案内：須藤】である。

(私にとっては2016年計画の一部リベンジ+花見である)

では前置きはこのぐらいにして『日本一桜山チャレンジ紀行』本文に入るがBGM「[河口恭吾 - 桜](#)」でも聴きながら読み進めて頂きたい。

4月13日「吉野山下山観桜」の前日夜NHK「ニュース・気象情報」は珍しく「奈良北部、南部の降水確率0/0」。安心して気持ち良く床に就いた。明けて本番の朝、清々しい気持ちで天満台西4丁目バス停へ向かった。



榛原駅までのバスの車窓や近鉄電車の車窓からの眺めも何か輝いて見えた。日頃無意識の内に通過する長谷寺駅には桜花が満開で嬉しく思い、これから訪れる吉野山の景観が頭に浮かび胸が躍った。大和八木駅のホームは通勤通学の混雑、橿原神宮前駅のホームに上がると吉野山の方面に向かうのか「花見」の雰囲気皆の顔に溢れていた。

近鉄吉野線急行は定刻 8 時 31 分、大和上市駅に到着。予約しておいた相互タクシーの運転手が待っていてくれて、乗車して程なく蜻蛉の滝麓にある「あきつの小野公園」に到着。公園整備中の管理人に聞くと「桜の満開は来週」との事。



9 時 15 分青根ヶ峰山頂を目指して登山開始。足腰が軽く会話が弾む。右手に蜻蛉の滝に注ぐ音無川の瀬音を聞きながら登り進むと次第に無言になる。谷川の音が左手に移り登る、登る、登る・・・

やがて左前に明るい空が開け大峰山脈の尾根を望める登山道に出た。多分、大天井岳、四寸岩山辺りかも知れない。そして山上ヶ岳（大峰山）はその奥であろう。

川上村と吉野町の標識が立つ吉野大峯林道に出る。吉野山の主峰「青根ヶ峰」は目と鼻の先である。

11 時 05 分今日のターゲット「青根ヶ峰 858m」山頂に着く

(所用時間 1 時間 50 分、歩行距離 4.2Km、標高差+578m) 計画より早いペース。



後は「吉野山下山観桜」残すのみ、全員足腰に異常なし、安堵する。周りの山肌には重機が入り古い樹木の伐採、新しい桜の苗木が植えられている。吉野山全体で 3 万本の桜が 5 万本に増え 10 数年後には一層素晴らしい桜山になると思われるがその時私は米寿・卒寿に近づく。何にも言えねえ(笑)

時間的余裕を意識してか、美浪画伯のスケッチタイムを挟み足取りも軽い。

「吉野熊野国立公園・吉野山・奥の千本」の標識を過ぎ「西行庵」に至る。

＜願わくば花の下にて春死なむその如月の望月の頃＞を想う。

桜は未だ蕾、この山紀行を寄稿する頃には「花吹雪」と思いながら後にする。

参拝客の多い金峯神社を過ぎ、写真撮影の為、好きな遠望場所を立ち寄った。

西に1月に雪見に登った金剛山、5月にツツジを見に行く葛城山、二上山の山並み

北に竜門ガ岳、鳥の罫屋山、その奥に鳥見山、貝ガ平山、香酔山、額井岳、戒場山が望める。【吉野山-12Km-鳥の罫屋山-14Km-額井岳】と直線距離は意外と短い。



奥千本口、吉野水分神社を経て「花矢倉展望台」に。着くと20名位の外国人団体が吉野山の花景色をバックに記念写真撮影を楽しんでいた。

吉野山観光協会【公式サイト】には「吉野山には古来桜が多く、シロヤマザクラを中心に約200種3万本の桜が密集しています。儂げで可憐な山桜が尾根から尾根へ、谷から谷へと山全体を埋め尽くしてゆきます。」とあるが正にその通りの景観である。

その上千本、中千本の中を一寸夢心地、花に酔った感覚で下った。



上千本エリア「花矢倉」から人混みの中を日本一の花見を楽しみながら一気に下山。  
13時50分中千本エリアの「[静亭](#)」に着き遅めの昼食となった。  
満開の中千本を眺めながら呑むビールは格別である。地元で採れた食材の昼膳とデザートは若女将が振舞ってくれた葛餅。店の前で若女将にも入ってもらって記念写真を撮り、店を出た。吉水神社境内から名勝「一目千本」を眺め金峯山寺蔵王堂の前を通り人混みの中を進み下千本の坂道を下り近鉄吉野駅の前に出た。



#### <エピローグ>

俳句の世界でも四季の表現として中々粋な季語があると聞く。春の「山笑ふ」→夏の「山滴る」→秋の「山装ふ」→冬の「山眠る」。今回4月13日の吉野山を表現する季語は「山笑ふ」か？ 否、何かピーンと来ない。矢張り『山酔わす』なら合点承知の助である(笑)

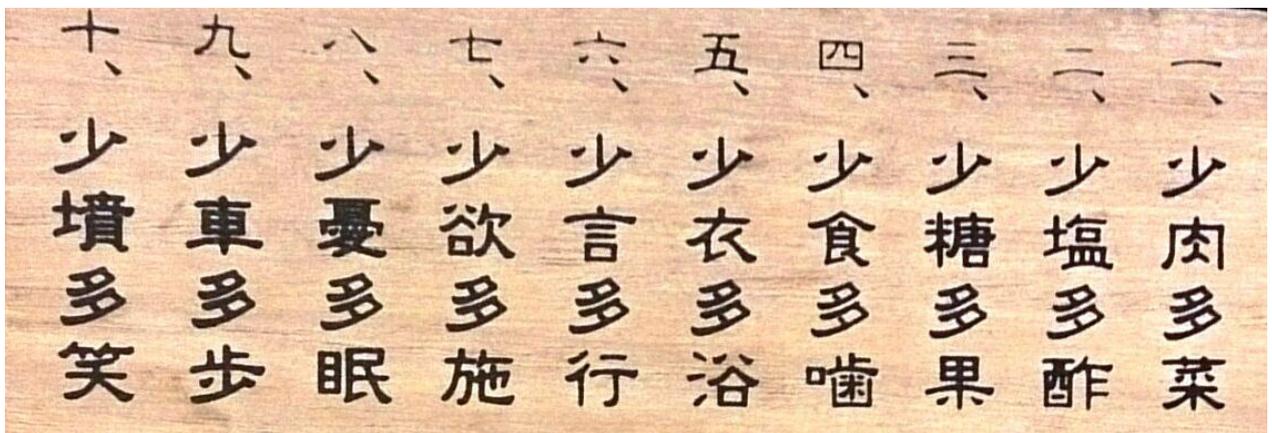
又、こじつけになるが人間の一生もこんな風に想うと面白い。  
今の私は「山装ふ」、次は「山眠る」、その次は何があるのだろうか、分からない。  
自然界の「山眠る」の次は「山笑ふ」。人間も自然の一部なので「世代交代」で「常若蘇生」になるのだろうか。

一寸、ググると(Google 検索ををすると言う意味の流行りコトバ)  
春の気候や情景を表すコトバにも「桜」が使われているものがたくさんあるとか。  
例えば、満開時期の「こぼれ桜」、散りゆく様の「花筏」や「花吹雪」、  
夜桜見物では「花冷え」の中、幻想的な「花明かり」を楽しむ～  
・・・何か目に浮かぶ様である。

日本一の桜山のイメージが脳裏に残っているからかも知れない。書いている内に「五・七・五」が頭に過ぎったので書き留める。  
<散り際も人喜ばず桜かな>、 更に<散り際が美しいのは桜だけ>  
現在の自分はどちらの「五・七・五」かと考えて見ると【理想と現実】と思えてくる。

何故この山紀行を書いたかと言う動機を書き添えたい。一つは3月3日の会誌「八剣山の会春秋」の編集会議で「各行事企画案内者にその山旅等紀行を書いて貰い寄稿を」と言う方向付けがなされたこと。二つ目は最近流行りのシェアを積極的に実践しようと思ったこと。シェアには色々な意味づけがある様だが、私は「いいものを独り占めしないでお裾分けすることは善行である」と云う自負心を持つからである。

最近、歳のせいか「心身に良い生き方」を意識しながら暮らしている。私の経験則から『悪口より誉め言葉、責めず・比べず・思い出さず、程よい拘り』辺りであろうか。又、以前、何処かの寿司屋で見掛けた健康十訓らしき掲示も悪くないと感じている。



エピローグが長くなってしまった。 お後がよろしいようで (笑)

※紙面の関係で載せられなかった画像は写真集『[日本一の桜山チャレンジ](#)』で。  
(スライドショーもダウンロード等可能)

## 屏風岩公苑の花見

2017. 5. 10 木山 裕昭

4月20日花曇りの中、「小さくても輝くオンリーワンを持つ曽爾村」の屏風岩公苑に花見に行きました。

9時に大和富士ホールに10人の精鋭が集合し出発です。途中、コンビニに立ち寄って、花見用の弁当とアルコールを仕入れて、一路屏風岩公苑を目指しました。



高見さんから教えて頂いた、珍しい紅白のしだれ桃を見に、不退寺へ。

その見事な咲きっぷりに一同驚きの声をあげました。

<紅白のめでためめでたや枝垂れ桃>

屏風岩公苑の第2駐車場へ到着です。ここで身支度をして、いよいよ、登山開始です。



急な階段を15分程登ると、屏風岩公苑に到着しました。



目の前には屏風岩(高さ200m、幅1.5km)が広がっています。そしてお目当ての山桜がところどころ咲いています。この景色は圧巻です。樹齢100年をこえる山桜は風格さえ感じさせます。

そして、いよいよ屏風岩の尾根を目指して、公苑の西側の住塚山へ通じる道を登り始めました。つづら折りの急登です、

20分程で、住塚山と屏風岩尾根への分岐に着きました。ここで一休みです。

ここから、屏風岩の最高地点である一の峰(936m)を目指して、慎重に足を運びます。ほどなくして、一の峰に到着。



ここから眼下には、薄くピンクがかかった山桜が見えます。覗き見るには足がすくんでしまいました。また、遠方には、曾爾高原はじめ曾爾の山々が見える、絶好のビューポイントです。



<屏風尾根眼下広がる芽吹く山>



一の峰を後に、屏風岩の尾根を、景色を堪能しながらも、慎重に縦走して、屏風岩公苑に、戻りました。そして、いよいよお待ち兼ねの花見宴会となりました。甲斐田さん、須藤さんからの差し入れのお酒で、大いに盛り上がってきました。

<屏風岩背にして花の宴かな>



美浪さんは、いつものようにスケッチに余念がありません。素晴らしい水彩画を描かれています。



そうこうしているうちに、花見宴会のお開きの時間がきて、下山することになりました。今回は、花見と登山と宴会の3つが楽しめた豪華な山行となりました。

<参加者> 須藤和雄、安田享、野田庄次、美浪敏明、赤井友洸、高見毅、真田一郎、甲斐田博幸、三明博夫、木山裕昭 以上 10名

<山桜屏風の岩に人を招び>

## 葛城山登山記

2017.5.14 木山 裕昭

晴天の5月11日、御所駅で下谷さんが合流して、精鋭10人が揃い、バスで葛城山ロープウェイ前に向かいました。ちょうど、つつじのシーズンでもありバスは超満員でした。



10時にロープウェイ前に到着しました。今回はロープウェイ組と登山組に分かれるため、大きな掲示板を見て、山頂での待ち合わせ場所を確認です。



野田さんと金城さんは、ロープウェイで山頂に向かいました。



須藤さんはじめ、健脚組の8人は、登山口で集合写真を撮った後、山頂目指して出発しました。

<靴紐を締めて向かうはつつじ山>



歩き始めて15分位で櫛羅の滝に到着。新緑の中、水しぶきがとても綺麗です。



衣服調整をすませ、いよいよ雑木林の急登にかかります。途中には階段がいくつもあり結構きつい登山道です。時折、鶯が励ましの声をかけてくれます。途中では頭上をロープウェイが登っていくのが見えます。

登り始めて、約2時間、葛城山上駅から山頂へ続く道と合流しました。そこから、10分ほど登ると、広大な山頂に到着です。そこで、ロープウェイ組と登山組が無事出会えて記念撮影です。



山頂の先には、一目百万本と言われる、燃えるようなつつじが一面に広がっており、「わー凄い」と歓声が上がりました。



<咲き競うつつじ眺めて昼餉かな>



美浪画伯は、スケッチに余念がありません。  
いつもながらの躍動感溢れる絵は素晴らしいです。



燃えるつつじは気持ちを若くしてくれるのでしょうか。  
童心に帰ったような元気はつらつの3人組です。

<山つつじ燃えてさながら火のように>



昼食後は、広大なつつじ園をぐるりと回遊し、思う存分、つつじを観賞しました。  
そして、北尾根ルート経由で下山しました。



<参加者>安田享、須藤和雄、下谷毅夫、美浪敏明、野田庄次、三明博夫  
小出雅康、金城清三、高見毅、木山裕昭 以上 10 名

<葛城のまこと百万つつじ燃え>

## 葛城山登山を詠む俳句

2017. 4

金城 凡生

山頂の風に夏帽飛ばされて  
葛城の躑躅（つつじ）を愛でるヘリコプター  
足投げて躑躅見下ろす昼餉かな  
ロープウェイ山上駅の風薫る  
惜しむかな浪花の空は霞みをり  
満開の石楠花撫でつロープウェイ  
葛城の山懐（やまふところ）の懸かり藤  
新緑のトンネルくぐり山頂へ  
夏めきて香久山の空白い雲  
躑躅園眺める背に金剛山  
箱庭や三山浮かぶ五月晴  
躑躅越し金剛山は指呼の間に  
葛城の山は紅色山法師  
草原の頂きで待つ登山組  
ロープウェイ新緑撫でて進みけり  
ロープウェイ降りて向かえば残花飛ぶ  
水車小屋見つけて嬉し登山口

## 雑詠句

実梅落つここがしばらく散歩道  
野良人へ気合入れるやほととぎす  
黄金色楽しみに待つ小判草  
特急の向きに逆らひ青田波  
遊び田の増えて益々遠蛙  
春航の駿河湾から富士探す  
春風や遊覧船は洞に入る  
黒船の下田の浜の鯉幟  
そのなりで寝姿山（ねすがたやま）は笑ふなり  
紅白の梅盛りなり関ヶ原  
陵（みささぎ）の空へ野焼きの煙かな  
大和富士枝垂れ桜の傘の上

以上

## 新緑の白髭岳

2017.5. 高見 毅

この白髭岳登山は“よか山です”と、韋駄天こと上岡さんのリクエストから始まった。5月18日7時大和富士ホール。体調不良で急に不参加となった真田さんの見送りを受けて須藤さん、赤井さん、小出さん、高見で出発。更に榛原駅で下谷さん、上岡さんが加わり、総勢6名、車2台で一路、川上村に向かう。天候は五月晴れ、新緑が何ともまぶしい。途中、道の駅で休憩して柏木から林道を通って神之谷の東谷出合の登山口に到着する。



登山口は標高530m



歩き始めは8時45分



東谷を遡行する



何度となく急登が続く

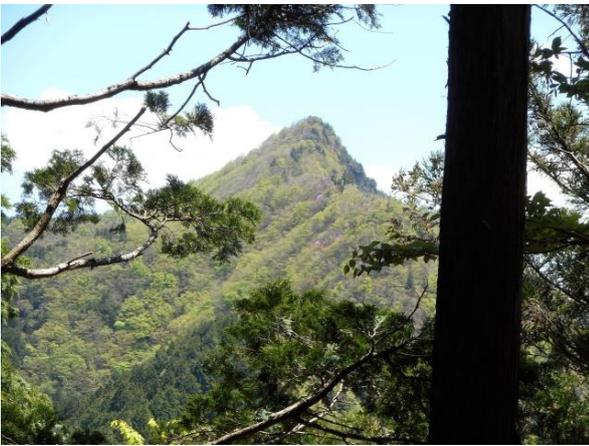
この山は柏木の集落から直接尾根経由で登るコースと今回の東谷コースがあるが、最近はこの東谷コースが主流のようだ。谷は深くはないがカツラの大木もあり、鬱蒼とした感じが深山を思わせてくれる。そんな中、水が枯れ気味の小さい滝を過ぎ、急な坂を登ると主流尾根に出る。ここは春浅い自然林、吹く風も爽やかで、陽射しは強いが汗も少なく、気持ちの良い登りが続く。でも余裕はない、木の根に覆われた急坂が平均年齢70才越えた高齢者に試練を与え、息を詰まらせる。慰めくれるのはピンクのアケボノツツジ。いいね！そして、第一関門の小白髭岳に11時20分到着。ここで一息入れ、次の登りに備える。



小白髭岳 1,282 m



アケボノツツジがとても綺麗



ピラミダルな山容がいいね



痩せ尾根（馬の背）を行く



頂上直下、最後の坂を登る



白髭岳の頂上 1,378 m

小白髭からは少し下ると、待望のピラミダルな山容の頂上が姿を見せる。いいね！カメラマンの須藤さん、小出さんが忙しくなる。さぁ行こうと、気持ちは進むがヤセ尾根のうえに登ったり、下ったりの繰り返した。そして、極め付けはロープを張った、浮石交じりの長い急坂、気を付けているが、上部を行く人から小石が飛んでくる。さて、この坂を登り切ると、大峰山系、台高の山々がパノラマで見渡せる頂上に到着だ。12時45分。



大峰の連山が青空に広がる



ツツジを背にもう一度、記念撮影

頂上は人気もなく、静寂。ただ頂上の標石のみが五月晴れの陽を浴びて輝いていた。この標石の裏には“一山一峯に偏せず、一覚一私に偏せず”と、この山を1500登山に選んだ山岳や学者で著名な今西錦司氏の書が刻まれていた。(32年前、83才の登頂)ここでゆっくりと、昼食。余裕の赤井さんは地図とにらめっこで遠望を楽しんでいる。そして、いつの間にか1時間が過ぎ、名残惜しき山頂を後にする。

下山時の恐怖の急坂は各人が間隔を取ってゆっくりと下る。でも、カーン、カーンと、遠慮なく小石が飛び静かな山に響く。危ない！こんな調子で下るため予定の時間もオーバーとなり、温泉入浴も割愛することにする。さて、登山口に帰着すると他車が1台あり、大和高田のベテラン登山者が明日の登山のためにここに前泊するとのこと。やるねえ！



下山後の全員集合16時45分

今回の山は標高差850mだったが、上り下りを入れた累計標高差は1000m、8時間の行程だった。100名山を征服した下谷さん曰く、こんなシンドイ山はほんとに久しぶりだと、満足ようだ。また、途中で足が吊ったり、ヒザを痛めた人も登山口に帰着する頃には元気に回復し、“よか山”を堪能したようだ。

無事の下山と皆さんの満足顔をみていると 企画の私も良かつなあと、安堵した。

途中の杉の湯の道の駅で今回、車をお願いした小出さんは愛用の帽子をなくしたことも忘れておいしそうにアイスクリームを食べている。 来月はいよいよ八経ヶ岳ですよ。

(完)

## 近江・磨崖仏・・・金勝山

2017.5.10 安田 享

金勝山は、滋賀県栗東市南部の山地の総称。花崗岩の巨岩がむき出しになった独特な景観が広がる。

昭和の随筆家、白州正子が「素晴らしいというより、凄まじい」と表現した風景。岩に神が宿ると考えた古代信仰の景観。岩の上から琵琶湖、眺望。

山の中腹に、杉木立の参道の奥に金勝寺（こんしょうじ）がある。本堂には、四つの神棚があり、9世紀にこの四神に祈る役目を朝廷より与えられている寺である。古代に仏教文化の重要な拠点であったこの寺は、奈良時代の僧で東大寺の初代別当、良弁（ろうべん）の出身地との説もある？

この山の反対側中腹には、ふくよかで優しい顔をした狛坂磨崖仏（こまさかまがいぶつ）がある。山の中にこれほどの磨崖仏があるのかと驚く。

周囲には、瓦の欠片が散らばっている白州はこの磨崖仏を「人里離れたしじまのなかに、山全体を台座とし、その上にどっしり居座った感じである」と表現。

9月22日の例会で訪れる。参加されたい。



(金勝山 天狗岩)

## 飛鳥・幻の寺・・・大官大寺

2017.4.23 安田 享

飛鳥の北、雷の丘を越えた道路右手、田畑のなかに「史跡 大官大寺跡」の碑がある。

大官大寺は、余り知られていないが、文武天皇の時代、飛鳥の地に始めて建立された国を守護する官立の寺である。発掘調査から、飛鳥最大の寺院（東西144m、南北195m）。藤原京の東の端に位置し、古代の「中ツ道」に面していた。塔は、基壇（突き固められた土台）から九重塔と推定、その高さ100m。

（飛鳥の標高が海拔90mなので152mの天香久山を越える）。

かつて東大寺にあった東・西の塔の高さ100mと同じと推定されている。

（現存の最高・京都の東寺の塔55m 東大寺の塔：再建構想がある）

天皇中心の仏教による鎮護国家の象徴として官立の寺を建立する必要があった。豪族、蘇我氏の氏寺、飛鳥寺（日本最初の寺院）に対し、鎮護国家のために天皇が建立した官立の寺、大官大寺。なお「大官（おおつかさ）」は、天皇の意味。唐の都、長安に東・西寺院が配置されていた都城制（都市計画）にならい、日本の都、藤原京に、大官大寺に続き本薬師寺がたてられた。

大寺は、天武天皇が企画し孫の文武の時代に完成。

平城京遷都に従い大官大寺が奈良に移転したのが、現在の大安寺。

発掘調査によって大量の焼土や瓦が発見されたが、このことは、和同4年に火災によって焼け落ちたと記述のとおりであることも確認された。（歴史書・扶桑略記や寺史・大安寺資財帳）五重塔などの塔は、経年劣化による倒壊ではなく、ほとんどが落雷に依る焼失。

飛鳥散策の際に大官大寺に思いをはせては、如何ですか？



## ハワイで親孝行

2005(H17) 12/10～18 9日間 オアフ島（ホノルル）、マウイ島（ラハイナ）へ行く。

私の母は5年前に弟・妹夫婦とハワイに行きとても楽しかったという。今回は小生夫婦と弟夫婦、と90歳の母とホノルルマラソンに参加する。車いす持参する。

2回目の弟は毎年マラソンに参加しているスポーツクラブの7名とフルマラソンに挑戦、私と家内、母、弟の奥さんはレースデイウオークの10km走に参加する。

よくよく考えると母や弟とは海外旅行に行くのは初めてだ。ここは親孝行に徹し良い思い出を残したいと思う。

今回のツアーは、母の知人が小さな旅行代理店をしていてスポーツクラブのメンバーと毎年ホノルルマラソンにツアーを募っている、我々は関空から韓国経由、新装の仁川（インチョン）国際空港で母・弟夫婦と子供2人を含む31名の福岡組と待ち合わせ合流する。

ソウルで半日観光する。

この時期ソウルはめちゃ寒い、韓国ドラマで俳優がいつも白い息を吐いている光景が実感としてわかる。完全冬装備だ、明日は常夏のハワイ、短パンとアロハの夏服とギャップがある。観光も目一杯、景福宮、キョンボックンでは華やかな王朝絵巻の民族衣装の守門将の交代式を見たり、大統領官邸（写真撮影禁止）を遠くから見たり、日韓ワールドカップのサッカー場などを回る。昼食は大きなジンギスカン風の鍋にたれ付きの焼き肉ともやしなど野菜が山盛りのブルコギを大衆食堂の大部屋で食べる。なにより小生の好きなキムチもどっさり、お代わり自由がいい、旨い。

午後8時発ホノルル行の大韓航空に乗る。乗ってすぐ機内食は石焼ビビンパかフィッシュと問われるが小生はフィッシュにする。時差マイナス19時間だが2日近く時間がたっても日付が変わらず1日が長く感じる。約8時間のフライトで朝8時半ホノルル着。

ホノルルは喧噪としている、活気がある。バス待ちの所にはHISや阪急交通社、JTBなど看板をかざした現地係員が待っている。ひと際目に付くのはリムジンが数台待機している。

ハワイではタクシーにリムジン（キャデラック、7人乗り、2時間以上利用が条件、2時間で100～200ドル、7人乗れば安い）利用も珍しくない。日本語の話せる運転手付きだ。

ホテルに荷物を預け、昼食は歩いて5分くらいの所のレストランへバイキングだ、肉、野菜、ケーキ、飲み物、アイスクリームなどもありつつい多く取ってきて食べ過ぎになる。一人20数ドルと安い、当時のレートは1ドル123円。

近くのバス停からバスに乗りマラソンの申し込みをするコンベンションセンターへ行く、予め日本でホノルルマラソン協会日本事務所に申込用紙と参加料3500円を払いゼッケンを貰っている。ここでTシャツの引換券でレース用の緑のTシャツを各自貰う。マラソンランナーは靴に小さなチップをつける。これでフィニッシュの着順がわかる。ある時間内に完走した人は次の日の新聞に着順と完走時間が掲載される。

我々はスポーツクラブのネーム入りの黄色のTシャツを支給されていたのでこれを着用する。一角に日本のスポーツ用品、ミズノなどのメーカーが靴などのランニング用品を売っている。またスペイン、バルセロナのマラソンメダリスト有森裕子さんがサイン会をしていた、カメラを向けると外人の旦那が彼女に声をかけ入れ替わり立ち代わり一緒に記念写真を撮る、ラッキ

一だ。彼女も10Kmレースウオークに参加、途中で出会い声をかけてくれる。我々は母を車椅子に乗せ走るといふより歩いているので目立ったのだろう。

バスはマラソンランナー用に無料のバスが走っている。帰りのバスは満員で私一人乗れず、あとの便に乗りワイキキビーチで降りると、皆待っていてくれたハプニングあり。

ホテルはワイキキビーチまで3~400mと一直線でわかりやすい。コンドミニウム形式で部屋にはガス、冷蔵庫、レンジなどが揃い鍋や食器一式がそなえつき、テラスからビーチが見える我々は近くのスーパーで食材を購入し自炊する。風呂も日本式の洗い場付きで申し分ない。

12月11日 朝2時半起床、3時ホテル発、真っ暗だ、20分くらい歩いたホノルル動物園駐車場からスタート地点のアラモアナパークまで無料バスが次々出ている。スタート地点はすごい混雑だ。仮設トイレが30ヶくらい並んでいて女性群が長蛇の列、街はマラソン一色だ。

JAL主催のホノルルマラソンは今回が34回目、マラソンランナーは28,000人近く、10Kmのレースデイウオークは1万人近く、車イスのマラソンランナーが最前列、次に招待選手、それに一般ランナー、我々は最後尾から出発。スタートに合わせ花火が上がり音楽隊のマーチ演奏、日本からタレントの坂口（ハワイ在住）があいさつ、後日テレビでこの様子が放映される。

参加者の6割は日本人、TVで知ったが間寛平、漫才のサブロー、元阪神の川当らも参加していた、文字どおり世界中からランナーが集まるイベントだ。マラソンは5時スタート、我々は約20分後にスタート、私は母を車椅子に乗せ押しながら歩く、最初は慣れなく前のランナーの足に引掛けたり、家内と弟の嫁と交互に押す。途中クリスマスのイルミネーションや給水ポイントあり、早朝にもかかわらず沿道には応援の人が集まっている。適当な所に仮設トイレなどあり沿道のホテルもトイレを解放、警察や警備の人、ボランティアなどホノルルの街中の人サポートしている。我々は2時間10分くらいでフィニッシュする。完走証と記念のうちわを貰う。

近くのテントにはボランティアが無料で茶菓子などふるまう休憩所や協賛のスポーツメーカー、旅行業者などのテントあり、冷たい飲み物や果物が売っている。芝生に寝転んでいる人は適当に疲れをいやし、達成感を味わう人たちがいっぱいだ。我々はマラソンをしている弟の応援に沿道に行く、ここも応援の人で一杯、世界の頑張れの言葉が入り混じる、国際色いっぱいだ。平和を感じる。いろんなコスチュームで走り楽しんでいる人もいる、それにしてもこのひと時に3~4万人を収容するホテルがあることも驚きだ。

帰りにコンビニによる、日本食も多く、ざるそばや巻き寿司を買いホテルで食べ休憩する。夕方はワイキキの浜でフラダンスショーがあるというので出かける。ホノルル市のはからいで地元の愛好者の子供達を含め数グループが踊る。ゆったりした腰や腕、手の動きそれぞれに意味があるのだろうが優雅で癒される。

夕食はグループで浜の近くのパシフィックビーチホテルの地下でビュッフェスタイルの食事をする。壁面一面が巨大なエイが何匹も泳いでいる水族館になっていていろんな魚が泳いでいる。そんな中での食事初めての体験だ。おふくろもビールを飲み結構食べる。

元気な秘密はよく食べることだと思う。

街中の高級ホテルでも服装は短パンにアロハシャツ（小生も現地で購入）女性は短パンにTシャツやゆったり目のムームー、スリッパ姿でOK、それにしてもハワイ風の大柄な花模様はカラフルで常夏にぴったり。

次の日は主催者家族数人とワイキキビーチより観光客の少ないアラモアナビーチヘタクシーで

出かける。昨日マラソンの大混雑した出発地点だったが今日は跡形もなくいつもの状態に整備されている、泳いでいる人はまばら。海はブルーできれい、なんと小生慌てていて水着など入れていたリュックをホテルに忘れて出かけ、皆泳いでいるのに失態、ビーチにはトイレやシャワーが完備している。何人かはシュノーケルを楽しんでいる。ここからはダイヤモンドヘッドが遠くに見え、林立するヤシと絵になるベストショットの場所だ。

この公園の向かいに巨大なショッピングセンター、アラモアナセンターがある。

日本にある郊外型スーパーの10数倍の広さがあり、一角には世界のブランド店が軒を並べ、レストラン街には世界の料理店があり、大衆向けファーストフード店などもあり、一日中楽しめる。適当にお土産を物色、帰りはタクシーでホテルに帰り、夕食に近くのスーパーで分厚ステーキやビールを買い込み、アメリカの食を体験する。日本のステーキより2倍くらい厚く3分の1くらいの値段で食べた一という感じになる。

12月13日 我々家族は別行動でダイヤモンドヘッドへタクシーで出かける、15%くらいのチップを別に払うのは高いと感じるがその国の習慣なので従う、小銭がないときはおつりをしっかり要求する。公園入口で入園料1人1ドルを払う、標高232mと低いが一般観光客も多い、年寄から子供連れまで楽しめる。登山というよりハイキングだ。中には100キロ近いデブのおばあちゃんも登っている。

頂上直下は長い急な階段が続くが40分くらいで頂上に着く。

頂上には戦争時の砲台跡がある。展望台からは紺碧の海が広がる。やっぱり美しく感動する。有料で登頂証明書が売っている。私と弟夫婦が登山。家内とおばあちゃんは登山口で待つ。下山後タクシーでアロハタワー目指す。ここは海の玄関口で沖にはオランダの豪華客船が停泊、タワー10階の展望階からはホノルル湾が一望できる。隣接のマーケットプレイスでは土産屋があり食事もできる。

ワイキキに帰り有名ホテルを巡る、クリスマス前なので各ホテルには豪華なツリーも楽しめる。土産を物色するのも楽しみの一つ。ガイド本に書いてあったチーズケーキファクトリーに行く、何時間も待つと書いていたが少し待ってチーズケーキを食べる。やっぱり量が多いが旨い。今日まで4連泊したマウイ島は忙しくアツという間に終わる。

12月14日 8時フロント集合、各自TAXIでホノルル空港へ向かう、空港は馬鹿でかくしっかり準備しておかないと迷う。マウイ島に行くアイランド航空乗り場までバスで移動、飛行機は35人乗りのプロペラ機、我々メンバーの貸し切り状態、フライトは40分くらい、眼下に広がる海はコバルトブルーそのまま、美しい。

カパルアウエスト空港という小さな空港に着く。タクシーで30分くらいのラファイナ港へ、海に面した2階建木造の由緒あるホテルに泊まる。部屋ごとにテラスがあり丸テーブルとイスがありくつろげる。

マウイ島はカメハメハ大王が18世紀末にハワイ諸島を統一最初に首都を置いた島でラファイナ港はアメリカの一大捕鯨基地だったところ。

近くにバニヤンツリー（ハワイ最大の木）が公園にあり一本の木が30数メートル四方もあろうか生い茂り木陰が憩いの場所になっていてフリーマーケットやコンサートが開かれるとか。街の中心は海岸沿いに500m近く通りの両サイドに店が並んでいる。

女性群は買い物に夢中、弟と私は今晚の夕食は少し張り込んで伊勢えびなどのシーフードの食べられるレストランを探しに行く、ガイド本にあるロンギーズを見つけ予約する。

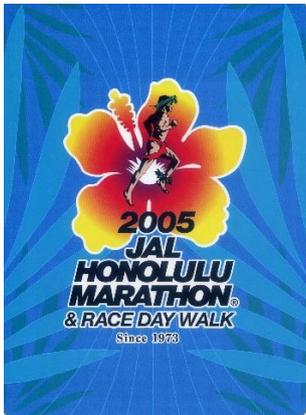
久しぶりに家族だけで豪勢な？外食を満喫する。

12月15日 ホテル近くで朝食を食べ、明日行くシュガートレイン（昔サトウキビを運んでいたが今は観光用に走っているトロッコ風電車）駅の下見に行く、日中は結構熱いが湿度が低いので汗をかくほどではない。

帰りに大きなフードセンターを見つけ昼食用の食糧を買い、ホテルに帰りテラスで食べる。午後2時半にホエールウォッチングを予約していたので150人くらい乗れるという船に乗る、デッキから必死に目を凝らすがつっぽが海面すれすれに2度ほど見れたのと遠くで塩を吹いていたのが見えたがガイド本にあるように半身海上に身を出すような光景はそうあるものではないと思う。4~5月頃は産卵のため多く集まり見られるとか、おまけでイルカが数頭並走してくれたがちょっと期待外れだった。夕方おふくろと家内3人で街はずれの中華料理店で餃子やラーメンなど食べる。

12月16日 ハワイ最後の日シュガートレインに乗り、途中カアナパリ駅下車、ホエラーズ・ビレッジまで歩く、ホテル玄関に大きなクジラの骨格見本がある、そこを下るとビーチに出る。昼食をはさんで自由行動、小生初めてハワイのビーチで泳ぐ。ワイキキでも感じたが現地の人や観光客は老人までビーチで泳ぎ楽しむが、我々グループの年配女性陣は恥ずかしいのか泳がない、こんな美しいビーチがあるのにもったいないと思う。昼食はファーストフード店や中華の総菜などが売っていて、それを買い浜辺の木陰で食べる。家内もおふくろも土産もの探しにあれやこれやとなかなか決まらない、最後までショッピングに忙しい、まあそれも楽しみなのかと思う。

12月17日 帰りはホノルル経由、韓国経由、韓国は雪が降っていた。関空着。芸能人がハワイ、ハワイと行くのが少し理解できたように思う。何か親しみを感じる国だ。何より母の元気な姿を一緒にいて実感出来たこと、親孝行が少し出来たかなと自己満足の旅だった。



母とレースデイウォーク完走する

アラモアナビーチよりダイヤモンドヘッド遠望



ダイヤモンドヘッド頂上より  
なによりハワイは自由、平等、平和を感じた。

有森裕子さんと記念撮影

マウイ島のビーチで泳ぐ

THE END

## 【四方山話】最近流行りのシェア考

2017.5.20 須藤和雄

高齢期の暮らしには「今日用」と「今日行」が不可欠だとの話を聞いた事がある。  
また、人によってはその二項目にプラスして「今日感」も要ると云う。  
毎日「用事＋行き先＋感動」があれば充実した日々を送れると云うのだろうか。  
私は最近「共有」も加えたいと思っているので、その訳を以下に述べてみたい。

【その1】最近、観光地で一生懸命写真撮影をしているヤングレディに出くわす。  
またその様な光景をインタビューしているテレビ番組も見た。彼女達曰く「撮ってフェ  
ス友に見せるんだ！」とか「この写真を即インスタアップや～」と云う。成程、分からな  
いことはない。SNS(ソーシャルネットワークサービス)でシェアするため、と彼女達は  
口走っているのだ。  
また、インターネット、とくに **Twitter** でご朱印やご朱印帳についての情報が交換され  
ていて、彼女たちは『ご朱印ガール』と自分たちを呼び [「御朱印集めガイド」](#)すら存在  
していてそこで学習しているらしい。  
この様に社会現象化してしまった「シェア」とは・・・辞書によると〔人と〕共有する、  
〔人に〕語る、披露する等とある。

この社会現象の紐解きは心理学者マズローの「欲求5段階説」が入口になると思う。

- ①生理的欲求／生命を維持するための食事・睡眠・排泄など
- ②安全欲求／安全性、経済的安定性、健康の維持など
- ③社会的欲求／愛を求めたり、孤独・無縁状態から回避など
- ④承認(尊重)の欲求／集団から価値ある存在と認識されたいなど
- ⑤自己実現欲求／自分の持つ能力や可能性の具体化など

そして『①②が満された上で、③④の実現を目指し更には⑤を願う人が多い世の中の風潮』が社会現象の根底にある、と云う理屈は如何なものだろうか。

従ってこれは別に新しい事ではなく昔から有った人間の営みであり大きくは2分類でき  
ると思う。

- ①有償シェア・・・携わる人々の生活を支えている新聞・書籍等出版物、放送・映画・演  
劇・芸術等。これらは売上高やパトロンの好意で評価される。
- ② 無償シェア・・・コミュニケーション行為(交際)であり基本無償の営みでありその  
見返りとしてコメントの書き込み、評価の伝達等が期待されている。

大風呂敷を広げ過ぎたので、以下は②について私なりに整理して記述して見たい。

【その2】シェア文化は『見せびらかしの文化 vs 分け合う文化』と云う論者もいる。その内容は「見せびらかしをして自分の存在感を主張する」と云う側面と「いいものを独り占めしない善行である」と云う自負心もあり、これらの行動を支えている。この分野は大袈裟に言えば“Give & Take”文化、人間として当然のことであると思う。

最近の老若男女は何故写真を頻繁に撮りたがるのか？

◎技術進歩により手軽に良いカメラを持てる時代になった、

更には何時も身近にあるスマホのカメラ機能が向上した等が背景にあり

- ・暮らしの思い出シーンを記録するため
- ・メモ代わり、備忘録として撮影し、後で情報源として役立てるため
- ・写真撮影自慢の人は各種コンテストに応募して入賞を目指すため
- ・マイブログ等に掲載して他人に見て貰うため

ブログとは「Web を Log する」それが略されて Blog と呼ばれる。ネット上の生活記録である。最近では<小林麻央オフィシャルブログ [「KOKORO。」](#)>が有名である。

- ・SNS(ソーシャルネットワークサービス)でシェアするため

◎撮影した写真の活用方法の多様な流儀があり人各々

- ・写真店、コンビニマルチコピー機や自宅で印刷して、友人等にプリント配布したり、「思い出アルバム」を作る。
- ・メールの本文に写真貼付や写真ファイルを添付して送信する。
- ・前述「ブログ」に貼り付ける。
- ・SNSアップロード (Twitter, Facebook, Instagram, Google+, tumblr 等々)
- ・クラウドストレージ保管して、そのURLを配布する。

(Digibook, YouTube, Google フォト, NIKON IMAGE SPACE 等々)

SNSやクラウドストレージは基本的に無償利用が出来るので情報機器やネットワークを使って簡単利用する人が増えている。簡単に使える写真編集技術によって美しいものをより美しく見たい、見せたいのも人情である。従って見た人の反応を期待している訳で「簡易交際ツール」とも云える。

【その3】情報機器やネットワークが一般的になってきた昨今、いま一つもの足りないものを感じる。

それは直ぐに逢って顔を見ながら会話が出来るとにも拘わらず何故シェアがこんな流行するのだろうか？と云う疑問である。

朝の散歩道で聴くポッドキャスト番組「日々是好日」で芥川賞受賞作家、[玄侑宗久](#)さんが語った興味ある放送がある。タイトルは「喫茶のすすめ」で、彼の主張の内容が以下の通りである。

珈琲豆挽き、湯沸し、ドリップする、味わう、その間ゆったりとした時間、ゆっくり考え事が出来る。現代人のお茶はパック入り、ペットボトル入り、スピーディーに飲めるが

バタバタして落ち着かない。結論を急がない、うるかす(東北の方言でじっくりと時間をかけて内部まで水分を吸わせる)、そうするととんでもない良い結論に至る事がある。閃き事のメモを尻ポケットで温める(醸成)、落ち付いた時読んでみる、閃きの評価が変わる。半面多くの若者はネット検索、スピーディーに答、じっくり考える必要がなく、一件落着。更にはSNSによるシェア文化、熟慮なしにシェア、一応満足、コメント書き込みは待たない、『物思いに耽る』人や事が殆んど無い昨今・・・

【その4】対話の重要性を再確認、SNS繋がりだけでは非力、生身人の繋がりも必要 SNS(ソーシャル・ネットワーキングサービス)からFTF(フェース・トゥー・フェース)へコミュニケーションの重心を移す提案がある。

(米国心理学者シェリー・タークル著「一緒にいてもスマホ」)

FTFには一方向的な情報伝達ではなく、相手との相互調整と理解のプロセスがあるが、SNSには相手との相互作用は発生せず情報受け渡しのみで対話が殆んどない。スマホが近くにあるだけでSNSが気になって対話に集中できない人もいるし、対話がネットワーク経由で代替できると安易に信じてスマホ頼りになる人も少なくない。毒薬なら断てばいいがスマホには利便性もあり、手放せない人が多い。利便性と豊かな対話を両立させる様な暮らしが必要と思うが・・・

実は私もスマホを常用しているが、友人の奨めで「一週間スマホ断ち」に挑戦したことがある。結果、一日で苦痛を感じ挫折。病気なのだろうか？ 病気なら病院の何課で診て貰えば良いのだろうか？ (笑)

【結び】実は私の身の回りにもこの様な生活習慣的振る舞いを多々見掛ける。

- ・四季折々俳句を詠んで他に披露する。披露方法も新聞投稿、メールに添える等々
- ・写真撮影をして色々な手段で友人に披露して楽しい時間を過ごしている
- ・絵筆を持って野山を駆け巡り自然に溶け込み生きている実感を味わう
- ・本会誌『春秋』への投稿者はシェア好きでなのであろうが、コミュニケーションの一部と思いながらも、ひたすらコメントを待ってるだけ。

※実は「八剣山の会」掲示板は [NTT Resonant Inc.が提供するポータルサイト](#)の一分野 [“goo ブログ”](#) サービスを利用して掲示場的な運用をしている。

振り返ると会員のお蔭で掲示板の開設から7年3ヶ月も経過した事になる。今では掲示板を大事にしたいと云う気持ちからメール署名に《八剣山の会掲示板の守り人》を使っている。

その間思った事は・・・

◎情報のシェアは他人への迷惑、場合によっては犯罪になりうるので細心の注意が要る。

◎情報をシェアするのは楽しくて便利な事かも知れないが、暇人の遊びなのかも???

色々思いを巡らして見ると多々あるが視力の衰えが加速しない内に筆を置く《おわり》

~~~~~

編集後記：やって来ました日本の夏が！＜宇陀なれや朝な夕なのホトトギス
凡生＞＜山の字に見ゆる青嶺（あおね）が大和富士 多迦夫＞夏季号お届けしま
す。この表紙絵は久しぶりに小西さんの作品です。題して＜二湖より羅臼岳＞知
床半島の名山、羅臼岳を川面に映し涼しさを招きます。▲春季号のこの欄で、寄
稿作品が減少傾向にあることで、皆さんへご協力をお願いしたところ、数多く寄
せられ15作品、50ページと分厚くなりました。有難うございます。その大き
な要因に次のお三方の寄稿がありました。下谷さんの＜100名山の思い出＞
赤井さんの＜尾瀬・燧岳は独立峰につき・・・＞小出さんの＜人生捨てたもんじ
ゃない＞▲下谷さんの百名山踏破は初めて知りました。凄いですね。林田さんに
次いで八剣山の会の誇りでもあります。下谷さんは文章を次のように締めて
います。『今この年になって新しい思い出作りに八剣山の会の仲間と山歩きがで
きる！』と喜んでいます。▲赤井さんの今回の寄稿は、尾瀬・燧岳に絞っての山
紀行ですが、その文脈から長きにわたる数々の山歴が思われます。そして今後の
寄稿も楽しみです。▲小出さんが山歩きに挑むようになったのは定年後だそう
で、当会に入会したのは2年半前。会風が自由で縛りが無く大変居心地が良いと
喜んでます。去年は初の3000M級の西穂高岳を経験し、この6月には百
名山で関西最高峰の弥山八経ヶ岳を楽しみにしています。▲この3人の皆さん
はこの山の会へ入会したことで、山歩きに新たな喜びを見出したそうで、私達同
志にとっても大変嬉しいことです。そこで僭越ながら皆さんにふさわしいと思
われるこの俳句はいかがでしょう。＜山恋へばいつも青春雲の峰 凡生＞▲
今号ではシリーズ物が2件ありました。まずは＜六甲山全縦走シリーズを終え
て＞これは真田一郎さんのガイド紀行。平成26年3月＜須磨浦公園＞から3年
がかりで50km踏破を、今回で六甲山の全山縦走を無事終えました。乙女の館
宝塚で六甲縦走を締めくくるとはロマンチックですね。ガイドの真田さん、お役
目ご苦労さんでした。▲次のシリーズ物＜琵琶湖トレイル紀行＞は美浪さんの
ガイドで今年は6回目。美浪さん以下の4人の健脚が揃っての21キロウオー
クでした。湖北観音の里 JR 高月駅から JR 長浜駅まで。このコース前回に続い
て歴史街道ともいえますね。小谷城・浅井氏三代・姉川の戦・小谷城址・お市の
方・浅井さん姉妹ゆかりの戦国時代へタイムスリップしました。来年の湖東エリ
ア巡りには私も是非参加したくなりました。▲他の寄稿については紙面の都合
で取り上げる事ができず申し訳ありませんが、今号への寄稿ありがとうございました。
今後ともよろしく願いいたします。▲次の＜第19号秋季号＞は原稿
締切8月末発行9月20日発行です。皆さんの寄稿お待ちしております。編集委
員から個別に寄稿依頼がありましたらご協力ください。

金城

~~~~~